利根川文化研究会

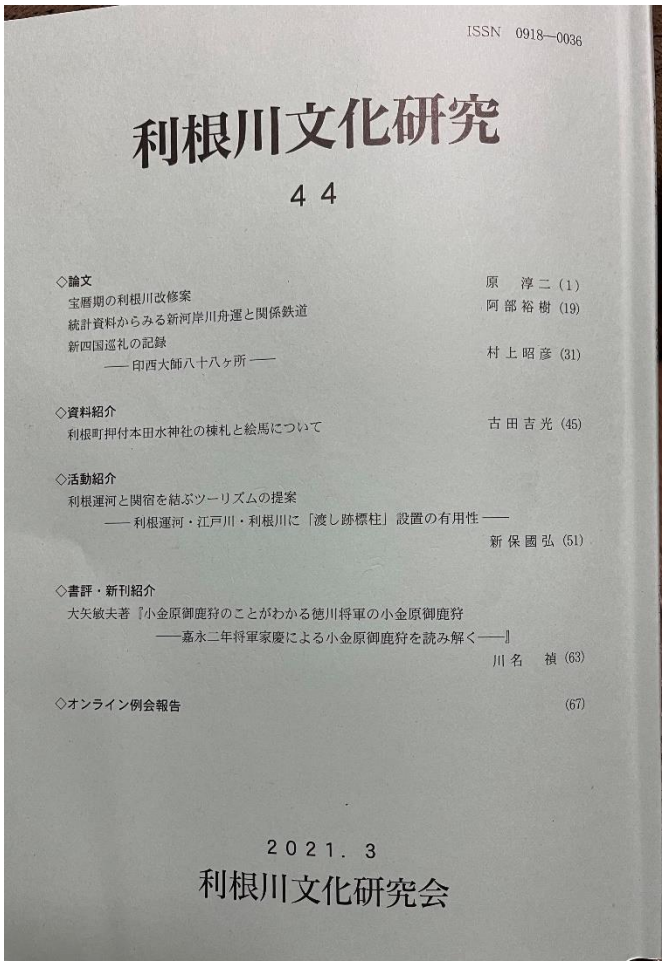
利根川文化研究会各位

オンライン例会を下記のとおり開催いたします。
今回は情報交換会とします。参加の皆さまから近況報告など頂戴できればと思います。

記

日時　2021 年 4 月 9 日（土）16:00～16:50
内容　情報交換会
形式　zoom によるオンライン形式

上記案内とともに研究誌
利根川文化研究　44
が届きました。



ISSN 0918—0036

利根川文化研究

44

◇論文
宝暦期の利根川改修案　原　淳二（1）
統計資料からみる新河岸川舟運と関係鉄道　阿部裕樹（19）
新四国巡礼の記録
—— 印西大師八十八ヶ所 ——　村上昭彦（31）

◇資料紹介
利根町押付本田水神社の棟札と絵馬について　古田吉光（45）

◇活動紹介
利根運河と関宿を結ぶツーリズムの提案
—— 利根運河・江戸川・利根川に「渡し跡標柱」設置の有用性 ——
新保國弘（51）

◇書評・新刊紹介
大矢敏夫著『小金原御鹿狩のことがわかる徳川将軍の小金原御鹿狩
——嘉永二年将軍家慶による小金原御鹿狩を読み解く——』
川名　禎（63）

◇オンライン例会報告　（67）

2021. 3
利根川文化研究会

利根川文化研究会誌より

P1～
宝暦期の利根川改修（サマリー）　　原　淳二
宝暦期は、権現堂川や中利根川の河床状態の変化により中利根川での通航障害が激しくなるなど、
17 世紀半ばに確立した利根川の水理機構に機能不全が生じた形となった。
それは、利根川水系からの江戸への舟運を可能にするためにデザインされたものだが、
中利根川の河床が高くなったことで赤堀川から逆川への流下量が増加し、中利根川で必要とする水量を供給できなくなったことが主な原因である。
そのために、関宿棒出し等で江戸川への通水量を抑えるものの、それでもなお河床悪化に対応できる水量は確保できなかった
18 世紀前半、権現堂川の陸地化によりほとんどの平水が赤堀川に流れ、関宿棒出しが設けられていた時点では、中利根川は 6 割、江戸は 4 割が流れたと推測される。
これでも、河床が悪化していく中利根川では渇水期の航路を維持することが難しかった
さらに、18 世紀半ば以降、権現堂川の水行がやや改善したことで利根川への分水が減少すると、そこでの通航障害が頻発したのも必然であった。
そこで、赤堀川からの通水に頼らない、利根川新航路として手賀沼航路や印旛沼航路が企画されたのである。
また、この水理機構では赤堀川が長い狭窄部を持つだけに、洪水時には陸地化した権現堂川に洪水が流れ込み、島川を通じて羽生領の遊水被害を引き起こした。
　そこで宝暦 2 年、今まで表面化することのなかった赤堀川の改修案までが提起されることになったのである。
さらには、それをきっかけに、従来の赤堀川と権現堂川による上利根川の分水機構を抜本的に変革する企画までが出されるに至たった。
その改編案にしても、まずは羽生領の逆水被害や権現堂堤の保持と言う治水対策上の観点から権現堂川の締め切りを求めている。
また、権現堂川河床変化が甚だしく、これに頼よっていては、中利根川と江戸川への望ましい分水比を保つことも難しいにである。
天保８年(1837)幕府勘定大竹兵衛は、羽生領の水害防止、利根川舟運の円滑化を目的に、権現堂川への通水を止め、その代わりに文化 6 年(1809 年)に続き赤堀川を拡幅し、関宿棒出しの幅を広げることを提案した。
それからしても、権現堂川を閉めて赤堀川に一本化する事は合理的な選択であったのだろう。

しかし、これを実施するためには、莫大な出費と周辺地域からの抵抗運動を抑える調整力が必要で、
結局は、「宝暦の治水調査」の理屈に安住し、面倒なことには手を出さないで放置することになった
そして、最後に宝暦期の幕府の治水政策についてである。
寛政改革期に治水行政を担当した勘定奉行久世広民いや勘定吟味役高尾惣市郎らによると、
宝暦6年の大洪水により諸国で大被害が発生したものの財政難を理由に応急措置で済ませた。
以後、これが慣例化して全国の河川状況が悪化する原因を作ったとし、
その評価は当然のことに芳しいものではない。
宝暦期の利根川流域においては、地域的利害を整理した上で、利根川全川を見通した総合的改修策が要請された時期でもあった。
しかし、幕府は羽生領や中川低地の村村から出された改修案に何ら答えることなく、
また社会基盤への地道な投資も怠った。
利根川で生じた河川問題の重要性は認識するものの結局民力頼みで、そのツケがやがて天明の大水害として現れることになったのである。

活動紹介 P59～
　利根運河と関宿を結ぶツーリズム　　新保國弘

⑸利根川　三ツ堀河岸と夏目漱石　　について
　夏目金之助(漱石)が 22 歳の第一高等中学校本科第 1 部の夏休み、友人 4 人と房総を旅した
時は利根運河開削工事中の明治 22 年(1889 年) 8 月 7 日、
霊岸島から船で保田に上陸し、海水浴の後、各所をめぐり、
銚子から汽船で利根川を遡行、
30 日の早朝、三ツ堀で下船し、
旗亭で休憩。
漱石は旗亭の欄干にもたれ、
夜明け前の朝霧に煙る利根川の景色を詠んだところで終わる
全編漢詩文の和綴じ本「木屑録」を

同日東京に帰宅後の9月 9 日に書き上げ
学友の正岡子規に批評を請うている
漱石の旗亭は、三ツ堀河岸の船宿「秋田屋支店」
と、平成 9 年(1997 年)2月
野田市は秋田屋支店の印鑑や支店の間取り図等を物証に、記者発表をしている
秋田屋の御子孫・秋田フサ氏を 2007 年に取材し、
漱石が秋田屋支店で休憩した時の宿主は、
明治 16 年から当主であった秋田友治郎
(弘化 2 年生まれ＝1845 年、当時 44 歳)
と確認できた。
秋田友治郎は銚子汽船と明治 17 年に契約し、
旅人宿営業願いを明治 19 年に、
料理屋営業願いを明治 25 年に出し、
川淵にあった秋田屋支店は明治 43 年8月の利根川大洪水で流され、営業を停止
翌明治 44 年 11 月に当該土地(三ツ堀字坊桁 2064 番 6、宅地 204 坪)は内務省が買い上げ、所有権移転登記がなされた

漱石が汽船終点の三ツ堀河岸から今上河岸に出、江戸川下の汽船で東京に帰宅という仮説を筆者が立てたのは野田市記者発表から 10 年が過ぎていた
それからさらに 10 年後の平成 22 年 2 月に
物流博物館の玉井幹司から、
今上河岸の枡田仁左衛門が、明治 20 年 2 月 25 日付けで
茨城県鉾田河岸の田山彦右衛門宛に、
三ツ堀河岸に 2 月 25 日に通運分社を開業した旨の書簡が、
鉾田市役所にあることを聞き、
同年 5 月、鉾田に行き、書簡の写しを入手、
その 7 年後に仲間と釈文を作成、
枡田家当主・枡田柚子氏にお持ちしたのは平成 30 年 2 月である

2014-5　漱石・子規交遊記念碑設置レポート　鋸南町鋸山
　私事、利根川文化に感興する契機でした。

https://ameblo.jp/ameblokuro604/entry-12469389093.html

(参考図書) 利根川近現代史、松浦茂樹　著
近代利根川改修の課題(論点整理)

1、上利根川における中条堤の役割
2、渡良瀬川下流部の河道整備
　天明 3 年(1783)の浅間山大噴火を契機として
利根川河道の著しい上昇が生じ、
渡瀬川の逆流が大きくなった。
　また、明治 20 年代になると、足尾銅山からの廃鉱の流下により
渡良瀬川下流部では鉱毒事件が大きな社会問題となった。
　渡良瀬川治水とこの河道整備の関係は
3、赤堀川、権現堂川、逆川の整理
　利根川、渡良瀬川合流直下流で
権現堂川、赤堀川に分かれ、
また逆川を通じて江戸川に分流するなど、
複雑な水理関係にあった。
　この間の河道をどのように整理していくのか
4、江戸川と中利根川、下利根川の分流
　利根川の洪水は、最終的には江戸川を通じて東京湾へ、中・下利根川を通じて太平洋に流出する。
　両河道の負担をどうするのか
　海までの河道の距離は、江戸川が中・下利根川の約半分で、江戸川に流すのが物理的に有利である。
　だが、江戸川上流部の関宿から野田に至る 20 キロメートルで台地が迫り、川幅が狭くなっている
　さらに、その途中にある宝珠花村:春日部市)では、河川際まで人家が密集し、広げることができない。
5、中利根川区間、茨城県猿島郡境町から布佐、布川の河道を整備
　ここは広大なで堤外地が拡がっていて、これをどのように整備するか、
また布佐、布川の狭窄部の疎通能力をどのようにするか
6、中利根川で鬼怒川、小貝川の大枝流が合流する。その合流処理をどうするのか
7、下利根川の河道整備と印旛沼、霞ヶ浦との関わり
　印旛沼は将監川、長門川、
　霞ヶ浦は横利根川、北利根川
を通じ利根川とつながっており、利根川洪水の遊水池となっていた。

この遊水効果をどのように考えていくか

以上7つの治水課題。